

第13号
昭和63年
1988

会報

にしきうら



高知県立須崎工業高等学校同窓会

目 次

母校創立五十周年近し、

心を合わせて記念の年を迎えよう……………同窓会長 清 家 寛………… 1
ご 換 拶……………学校長 森 岡 清………… 2
学 校 近 況……………教 頭 森 峯 雄………… 3
就任のご挨拶と進路状況の中間報告……………進路指導部長 中 内 裕………… 4
(関東支部がより) 同窓会 (S63年 6 月) ……………逸 見 悦 子…………5
(大阪支部がより) 須工の思い出……………汲 田 正 一………… 6
(高知支部がより) ヨーロッパかけめぐり……………横 川 寛 水………… 7
第九回総会報告……………岡 林 幸 保………… 8
(窪川支部がより) この頃想うこと……………藤 戸 進…………10
(幡多支部がより) 土佐の小京都、中村市……………松 浦 政 志…………11
相撲成年 2 部 横綱……………岡 崎 明…………12
初の海外遠征
パシフィック・リム・トーナメントに参加し……………津 野 隆…………13
ソフトボール部活動報告……………部 長 伊 藤 正 孝…………14
監 督 津 野 隆
再興なった須工ヨット部……………ヨット部顧問 小 松 茂 久…………15
事務局がより……………事務局長 島 崎 良 一…………16
昭和62年度決算報告……………17
昭和63年度予算……………17
終身会費納入者名追加分……………18
消息不明者……………19
会 則
各種証明証の発行について
編 集 後 記

表紙の写真は、電気科、川西先生にお願いしたもので、須崎湾内をバックに
本校在学の女生徒たちです。(5名在学)



母校創立五十周年近し 心を合わせて記念の年を迎えよう

昭和18年機械二種卒業

同窓会長 清家 寛

同窓会の皆様にはお変わりありませんが、お伺い申し上げます。

ご承知の通り、母校は昭和十六年四月糺町に於て開校、以来早くも半世紀を迎えんとしております。

お互いに、母校で学んだのは、ついこの前の感じがいたします。時の流れは誠に早いものです。

三年後の昭和十六年は、創立五十周年に当ります。

母校はその間、歴代校長先生を中心に諸先生方の御指導と御努力によりまして、大きく発展して参りました。

同窓会も、各地支部並に地域或は職域の役員さん及び有志の方々、並に会員各位の御理解と御協力によりまして、次第に発展してきました。誠によろこばしく、心から感謝と御礼を申し上げます。

さて、本年六月十八日、同窓会本部理事會に於きまして、森岡校長先生より、五十周年の記念事業の概略説明がありました。

母校に於かれては、学校とPTAが一体となつて記念事業計画が検討されております。

(具体的な計画につきましては、次回お知らせします。)

同窓会としましてはこの記念事業に協賛して、次の計画を推進することになりました。

- 一、校旗を新調して母校に贈呈
- 一、同窓会名簿の発行
- 一、旧校舍跡地に記念碑の建立
- 一、その他

校旗は、母校創立当時に作られたものですが、永年の使用に損傷もひどく、今回、同窓会で新調させてもらうことになりました。

同窓会名簿は、昭和五十三年三月に発行されて以来、既に十年を経過しており、新名簿の作成が急がれております。

母校跡地記念碑建立につきましては、今迄にも會報でお知らせしてきましたが、昨年引続き、委員の方々が諸準備を進めてくれております。

その他の詳細につきましては、次回お知らせいたします。

創立五十周年を三年後に控え、私達同窓は、お互いに心を合せ、一丸となつて、この記念すべき年を迎えたいと思つています。



校舎とグラウンドの間にある庭

本紙上を借りてのお願いで誠に恐縮ではございますが、会員の皆様の全面的な御賛同と、御協力を切にお願いいたします。

最後になりましたが、皆様方の益々の御健康と、御活躍を心からお祈り申し上げ、御挨拶いたします。



ご挨拶

昭和26年機械卒
学校長
森岡清

今年の夏は、天候の不順な地方もあって稲の作柄にも影響があるとのニュースがきかれますが、同窓会の皆様にはいかがお過ごしでしょうか、お伺い申し上げます。どうか、何よりも健康には格別のご留意をされながら、一層のご活躍をお祈り申し上げます。

さて、この会報も第十三号となり、第一号から集めてみますと段々とその厚みを増してまいりました。重ねた会報を横から眺めますと、まさに年輪を重ねるといふ感じがします。内容も、遠く近く、全国に広がった同窓の皆様からの寄稿に支えられながら、着実な歩みを続けている様子がうかがわれ、心強いかがりでございます。

学校としては、そうした同窓生の皆様方のご支援を、心に感じながら一層の努力をしなければと考えているところでございます。

学校の、この一年間の主な出来事につきましては、後の「学校近況」で森教頭先生から述べていただきますが、今年度は、これから学校前庭の南のほうに計算機実習室と図書室が新築されます。またそれに伴って、現在の図書室はテレビ・VTR、OHP等を含めた多目的な会議室に模様変えをすることになりました。

まさかとお思いになるかも知れませんが、これまで本校には、きちんとした会議室がありませんでした。この会議室の確保は、長い間の懸案でもありました。いま、この新築事業が県当局のご理解のもとに実現しましたことは、やはり先輩方のお励ましと、教職員・生徒が一心になってたゆまぬ努力を続けてきたことが評価されてきたためと、有難く、感謝の気持ちで一杯でございます。

また、ソフトボール部をはじめ、各運動部の活動も極めて活発になり、その成績も段々と成果が上がってまいりました。

それに、先に行われました京都国体では、相撲の一般の部で出場した、同窓会員で現在本校教員でもあります、岡崎明先生が、個人優勝という快挙をなすとげ、学校中が沸いたところです。

高知新聞でも大きな見出しで、学校名と共に報ぜられまして、誠に名譽なことでございます。

岡崎先生は、本校相撲部が、かつて休部になったときの最後の選手として、県内高校相撲界に君臨していましたが、大学卒業後、保健体育の教員として本校に帰られ、現在は再び本校相撲部を復活させて後輩の指導に当たっております。先生の優勝は相撲部にとっても学校にとっても大きな弾みとなって、今後の飛躍につながると思えます。

次に、先生方の移動の中で、特にご報告しなければならぬことがございます。

本校の一種一回生で、永年にわたって工業教育に携わってこられた、矢野象一先生がこの四月に定年退職されました。

先生は、昭和二十七年九月以来、三十六年間に亘り本校を中心として機械科のご指導をされまして、その母校を愛するお気持ちには、ことのほか強く、後輩の指導には特にご留意を頂きました。

私達も、先生の後をうけて本校の一層の発展を目指さなければならぬと考えています。

最後になりましたが、同窓会の本校創立五十周年記念事業は、まだこれからという感じではあります。特に、記念碑については今年度中に建立を目指して設計が進んでいますし、同窓会名簿の整理についてはパソコンを利用して、多様なニーズに対応できる態勢が整いつつあります。

この名簿の整理につきましては、ぜひとも会員の皆様方のご協力をお願いしたいところで、各地から住所変更が沢山寄せられています。未だ千数百人の不明者が存在しています。事務局ではできるだけのご協力をと、呼び掛けています。

どうか宜しくお願ひ申し上げます。

経済状況も、ようやく上向きの様子が見えてまいりました。

今年度の本校の就職戦線も、お陰様で大変好調で、先輩方の頑張りや、後輩達に好ましい影響を与えていることが、ひしひしと伝わって参ります。

学校近況

昭和27年機械卒業

教頭 森 峯 雄

同窓会の皆様方には、お褒りなくご清祥のこととお慶び申し上げます。一年を閲しまして、近況報告をさせていただきます。

今春の卒業生は、機械科六七名、造船科十三名、化学工業科十七名、電気科六八名、計一六五名で、卒業生総数六五二七名（女子五二名）となりました。お蔭をもちましてほぼ全員思いの進路に巣立つことができました。

新入生では、造船科、化学工業科共に定員を上回り一次二七四名、二次十八名の志願者があり、合格者は二三〇名となりました。女子生徒も昨年の化学工業科の一名に続き、化学工業科三名、電気科一名の入学生を歓迎しているところでございます。

前号では、集団教育で規律性も高まり、体育クラブの活動の高揚を契機として、文化クラブ、学習面での積極性と内面的な向上の息吹きを感じる旨の報告を致しました。

本年度に特記すべきは、資格試験合格者の飛躍的増加と設備の充実、機械科にMC（マシンングセンター）が導入され、コンピュータ室と図書室が新設予定となったことで、各科で次代を担う先進的な躍動を求めて努力しております。

特活関係では、ソフトボールが県体優勝で神戸I

日に進出し準々決勝で優勝校に惜敗、国体チームに監督と選手四名が選出され四国予選を突破し、京都国体に参加決定し、空手道部は六四総体の強化指定校に選ばれ、県外遠征合宿等で張り切っており、ヨット部が復活し九月国体に四名選ばれて、今後期待される活躍をしました。郡体でも、昨年同様多数の上位成績を獲得しましたが、個人では陸上五千米、砲丸、高跳、団体ではバスケ、ソフトボール、バレーボールで優勝しました。

なお、六四総体では、本校はソフトボールの会場校として一翼を担うことになっております。

文化クラブでは、その後も造船クラブ、コンピュータ関係クラブ等の活動が顕著に進められており、パソコン関係では、電気科の鎌田先生、造船科の西山先生の課外指導で、同窓会名簿の登録整理にも生徒達が参加していることを特筆したいと思えます。今後は、全領域で、より積極的に、自律創造的な活力ある教育環境造りを目指したいと考えます。

さて人事ですが、矢野象一先生、渡辺辰夫事務長、斉木やエ子主監が停年退職されました。矢野先生は本校一種一回生の大先輩として数回、長年月ご勤務され、母校を真に愛し、事に際し守って下さいました。渡辺事務長は、十二年間の長きに亘って本校の無事発展を背負って下さいました。斉木主監は数度ご勤務されて、本校を大切にして下さいました。事務長の後任には、本校に以前にご勤務された熱意の人、山脇正照事務長をお迎え致しました。

また川瀬柳有、坂本珠夫、岸本典幸、白川正夫、西桂子、谷口留美子先生他、長年ご勤務頂いた先生

方がご転任になりました。ご労苦に深く感謝し、益々のご多幸、ご活躍を祈念して、心からお礼申し上げます。

以下人事異動をご紹介します。

〔転任〕

〔着任〕

谷口留美子(国)	追手前	保木	正枝(国)	幡多農
竹平	元子(〃)	高知首	岩貞	一矢(〃)
池沢	俊幸(社)	佐川高	安並	紀子(社)
白川	正人(数)	西高	町田与志一	(数)
坂本	珠夫(体)	南高	窪田真奈美	(英)
西	桂子(英)	豊岡高	川村	重紀(〃)
本田	智砂(〃)	中村高	豊永	純一(体)
岸本	典幸(機)	東工	山本	幸彦(〃)
川瀬	柳有(電)	高知工	竹村	真(美)
大塚	佐智(化)	丸の内	三宮	哲明(機)
			中野	達也(〃)
			矢野	象一(〃)
			山崎	智恵貴(化)
			藤村	幸紀(〃)
			中井	彰(電)
			西森	昌身(〃)
			山脇	正照(事)
			中城	加代(〃)
				新採

以上新進気鋭の教職員を加え、共に理想は高く脚下は照顧して努力する所存です。一層のご指導ご援助をお願いする次第でございます。

皆様方のご発展ご多幸を祈念しまして、報告とさせていただきます。

就任のご挨拶と

進路状況の

中間報告



進路指導部長

(電気科教諭)

中内 裕

卒業生の皆様、如何がお暮しでしょうか。ご健勝にてお仕事に精が出ていることと拝察し、心からお慶び申し上げます。又、常日頃は後輩の就職等につきましても、何かとご配慮、ご支援を賜り厚くお礼申し上げます。

ところでこの度、本校教育の進路指導に尽力なされて参りました、中山正彦進路指導部長が本校電気科の科長に就任なされることになりました。その後任と致しまして、不肖私、中内裕がその職につくことになりました。どうか、よろしくお願い致します。もとより私は、浅学非才の身でございますが、この上は本校教育の進路指導の充実と生徒達の幸福のために、及ぶ限りの努力を致す覚悟でございます。つきましては、前中山部長同様に「指導、ご支援を賜ります様、重ねてお願い申し上げます。」

さて、本年度の進路状況に目を向けてみましょう。既に皆様方、新聞等でご承知の通り、内需拡大策が功を奏したのか、予想外の好景気を繁榮して、本校にも求人が殺到致しました。別表(1)にも示しました様に過去六年間の求人状況を見ましても、一目瞭然

一覧表をご覧下さい。例えば、昨年一年間の求人件数は四〇六社ですが、今年の場合には求人開始日より二週間目でその数を大きく上まわってしまいました。

また、遠路はるばるの学校の方にご挨拶に来て下さった企業も近年になく多くて、その応待に苦慮した日も沢山ございました。(七、八、九月中にご挨拶頂いた企業が約二〇〇社)

その上に、県内企業の求人時期が県外企業に比べて大変遅いということもあります。生徒側に見れば、そこが問題点として、確実に求人が頂けるのなら、それを待ってもいいと思いますが、それも計り知

別表〔1〕 過去6年間の求人社数一覧表

	県内	県外	関東	東海	関西	大阪	中・四国	合計
57	71	482	155	59	92	131	45	553
58	64	385	130	37	66	104	48	449
59	78	375	124	49	68	99	35	453
60	59	403	137	55	86	94	31	462
61	55	392	139	45	84	97	27	447
62	72	334	127	28	66	90	23	406
63	101	549	197	69	116	123	44	650

(63年度10月15日現在)

れない面があり、結局は県外の企業に切り替えざるを得ない現実もあります。そのような点が今一歩改善されればなあと思うところです。

そんな中で、いよいよ九月十六日より就職試験が始まり、二十日頃からその採否の通知が入り初めました。予想通り非常に高い採用内定率を示し、そのほとんどが採用、採用で返信されて参りました。別表(2)にも載せてある通り、十月十五日(一ヶ月後)現在の採用内定者数をご参照下さればお解り頂けると思います。(内定率約八九パーセント)

ただ一つだけ気になることは、県内企業への就職でございます。県下の県内志向が強い中で、求人件数が少なく、当然のことながら求人数も少ないわけですが、そんな状況の中へ沢山の生徒が応募致しますので、必然的に競争率も高くなり思わぬ不覚を取ってしまった生徒も数多く出てしまいました。

別表〔2〕 本年度の就職内定状況

科別	生徒数	進学	就職			その他
			希望	内定	未定	
M	72	11	56	47	9	5
S	29	1	23	20	3	5
C	29	3	25	23	2	1
E	80	10	68	63	5	2
計	210	25	172	153	19	13

(10月15日現在)



いずれに致しましても今年の場合には例外として、好景気の中で、しかも沢山の企業を目前にして、自分の適性に合った会社を選択できたことは事実でありましたので、大変幸せな年であったことは間違いないありません。

反面、そのことによる問題点もあろうかと思えます。例えば、何ら苦勞なしにすんなりと自分の進路が決まり、これからの人生における社会生活への対応がややもすると甘くなっているのではないかと懸念する向きもありません。

己が自活し、社会生活に対応して行かなければならないことは、いつ、どの様な状況のもとにおいても、大変厳しいものであるということを十分に承知しておかなければならないのです。その受け止め方が如何がだろわかと心配しているところであり、卒業生の皆様、こうした状況のもとでの後輩が後に続いて行きます。どうか、経験豊かな社会生活を基盤に後輩を叱咤激励してやって下さい。時には、厳しいお父さんになって欲しいし、またある時には、やさしいお兄さんになって欲しい、またある時には、そう言った先輩達を夢み、心から頼っておりませう。そして、何でも相談できる相手にもなってやって欲しいと思います。

そうすることによって、果立って行く若者の前途が洋々たるものになり、そこには大きな幸福が待っていてくれることを信じて疑いません。諸先輩のお力添えを重ね重ねお願いする次第です。

最後になりましたが、卒業生皆様方のご健勝とご活躍、ご多幸を心よりお祈り申し上げます。

同窓会（六十二年六月）

昭和38年電気通信卒業
(旧姓 長谷部)

逸見悦子

急ぎ足で歩くと汗ばむ程の陽気だったが、受付けを引き受けた私は定刻よりも一足早く会場へ着きたくて職場からかけ足で歩いた。同窓会へは時折出席するものの、当日近くなると必ずといつていい程、迷ってしまうのである。男性ばかりの会場へ出席する場違いのような気の重さと、同級生に久々に会える懐かしさをつい天秤にかけてしまうのである。ところが今年の同窓会ばかりはそんな事で迷ってはいられなかったのである。同期の梅下弘育さんが幹事だったせいもあるが、この二・三年流れていた同窓会が開かれる事になって以来、会場設定や、案内状の印刷発送、出席者の確認等々開催日前夜までの二ヶ月間を、黙々と協力して下さった彼の奥さんや、社員の方々の御苦勞を思うと、私だって何か手伝わなくては申し訳ない、そんな気持ち、何の迷いもなく私を会場へ急がせたのである。もちろん39Tの苅部(松井)40T原口(宗崎)花のトリオ?が受付けをあずかる。少し遅れて高橋先輩も出席、女性全員出席である。そして三〇分間の忙がしかったこと。来るわ、来るわ、受け付けて自分の名前を胸につけ

て席に着くのだが、そこから土佐弁が飛び交う。会場赤坂の「ねぼけ」の二階座敷は座席の移動もままならない程にぎつしりと埋まったのだ。料理など何ひとつない予備席まで埋まってしまったのだからその盛況ぶりは推して知るべし。会長の野瀬さんや幹事そしてT32の松木さんが苦心して作ってくださった出席者名簿は大好評、名簿を片手にこの人に会いたいのだがどの辺に座っているのだろうかとか、今日出席しているのだろうかとか、幹事に問い合わせしきり。少し残念だったのは須工が糺池にあった頃、用務員さんとして須工の敷地内で生活してらして色々お世話になった阿曾さんの奥さんが息子さんと現在千葉県に住んでいらつしやる事が分り、当日招待し皆をあつと言わそうと思っていたのだが、阿曾さんの足が痛むので止むを得ずあきらめた事だった。出席者九十二名というかつて無い多勢の参加者というだけに卒業以来始めてこういう席に出席したという先輩も何人かいらした。

少し余談になるが、私は須工三年間の間にたった一度だけ男生徒にいたずらされた事があった。一年の入学してまだ日の浅い頃だったと記憶している。トイレに閉じ込められてしまったのだ。たった一人だったこともあって恥ずかしさに声も出せずトントんと中から扉を叩くだけしか出来なかったのだ。そのうち何の音もしなくなり次の授業が始まりそんな様子にますますあせってしまったが、どうしても声を出せないのだ。トントんと心細くなって小さく叩いた時だった。カチンと外で音がしたと思つたら扉は音もなく開いたのだ。「どうしたの」と心配そう

な顔で立っていたのは、電車通学で顔だけ知っている先輩だった。わあと泣きたいような嬉しいような変な気持ちで、「ありがとう」と、いったり教室へ走ったことだったが、あとから考えてみると、外からの鍵がかかるのは誰かが手を使わないかぎりかかりようのない物であった。故に私は今でも鍵を開けてくれた彼が私を閉じこめたのだと思ひこんでいる。そんな事など思ひ出したこともなかったのに、S君も東京に居るよという一言で思ひ出したのである。彼は今風に言えばつつぱっていたというのだろうか。学生ズボンと思ひ切りつめたマンボズボン。学生帽は庇を短く切つてろうそくてテカテカに固めたのを少し斜目にかぶっていたものだった。そんな先輩達とすれ違つたりすると身を固くしていたものだったが、トイレを開けてくれた時は仏様のように見えた事等次々と二十五年前の須工時代が甦えつつくるのだ。放課後造船科の校舎の方から聞こえて来るトランペットの音に「あつM君が吹いているんだよ」とうわさし合った人、いいなあと思ひながらも何一つ言葉を交したこともなく卒業していった先輩、そんな人達が二十五年前の面影を残したまま、笑つて目の前に立っているなんて誰が想像できたであろう。受け付け係をやらせて戴いたおかげでいろいろの人達に会うことができた。私の息子達は今青春まつた中。先日も高二的長男が思ひあまつて言う。「ねえお母さん、僕好きな人が居るんだ。やさしそうなんだけけどその人の前に立つと僕、顔や身体が熱くなつて話せないんだよ。ねえ、お母さんもそんな時あつたの?」「そうよ、ずつとずつと昔だったけど

廊下でバッタリ会つたりすると真赤になつてね。ほんとうは話したいのに何にも言えなかつたわ、母さんも」。過ぎ去つた遠い記憶をたぐりながら、息子達と話しあう昨今である。息子の巣立ちももう遠くない。いやー、同窓会つてじつにいいものですね。



須工の思い出

昭和26年機械卒業

汲田正一

山田会長から、会報に大阪支部として、何か書いてほしいと電話がかかつてきた。昨年は出張の為に他の人にお願ひした事もあつて、この度は、なんとしても書かなければと、引受けたものの、悩むこと二週間、なにしろ文章を書くことと、人前で話をする事が、一番のいが手な私です。

思いつくまゝに落書きをしてみます。読みにくいところ、文章にならないところはご容赦ねがいます。大多数の方は同窓会といえ、小学校・中学校・高校と、それぞれちがつた友があり、それぞれに思ひ出のある集であると思ひます。而し私には同窓会という集いは、唯一須工同窓会だけなのです。

生まれは大阪、育つたのは広島県呉市です。小学校の友人たちは、皆それぞれ戦争のために、呉市に

集まつた人達で、終戦と共にそれぞれの故郷に散りバラバラ、わずかに近所でも遊んだ友が数人、それも年賀状ぐらいのつきあいでお互いに逢う機会もないまゝである。

この須工にも途中からの転校生。私の人生五十年の間に須工の五年間が、私の高知の思ひ出なので、須工に通学を始めて半年は佐川の伯母の家から、その後の一年間は母の里、越知町野老山から、自転車で佐川まで一時間半、戦後の物質の無い時代、まともなタイヤのない時で、「スケ」をしたタイヤ、今の若い人達には意味の解らない言葉、また想像も出来ないこととしてしよう。「スケ」とは、タイヤが古くなつて破れたところへ、別のタイヤを切つて、上にかぶせること。上にかぶせるのでタイヤの表面は凸凹になり、ペダルを踏めばガタガタと、スムーズには走らない。雨が降ればスケの間から砂が入つてパンク。雨の中を自転車を押して自転車屋へ、学校は遅刻、朝の列車が出れば昼まで汽車のない時代、学校につけば5時限目。

その後バスで通学を始めたが、木炭自動車、思う様に走らず相変らずの遅刻の常習者。

佐川から須崎までは汽車。凸凹コンビで通つた森岡清校長、斗賀野のトンネルの中へ汽車のデッキから落ちた佐川の同級生。汽車のデッキからブラ下つていて、信号機にぶつつかつた吾桑の同級生。南海大地震の津波の為に半年ほど多野郷から船やバスで通つた汽車通学の思ひ出が、頭の中をかけめぐつて行く。

ほとんど勉強をした記憶のない須工時代であつた。

クラブ活動は卓球部に入つて、授業が終つて汽車までの時間つぶしの様なものでした。

而し陸上部でもないのに、公文先生（現竹村先生）にすめられて、森岡淳君と共に高校駅伝出場、練習もせず初出場で三位入賞。つづいて出場した高知（佐川往復駅伝、これも初出場で実業団にまじつて五位入賞。高校の部では一位。それからは大会がある度に練習もせずにあつかましく、又たのしく走つた事が思い出されて、とりとめのない文章になりました）ことをお詫びいたします。

本年は大阪支部の総会にあたり準備を進めていまして。而しながら、役員の方達の努力、特に山田会長（二十一年機械）事務局の松村君（三二機械）大崎君（三二年機械）の努力にもかかわらず、総会に出席される方達が、少ない事を残念に思っています。特に若い方達が少ないのです。同窓会が、老年会にならない様に、若い人達に集まつて頂いて、先輩、後輩、同輩、一同に会して楽しくいつときをすごしませんか。

大阪には高知県人会があり、数百人が郷土料理に舌つづみをうちながら懇親会を行っています。私達が育つた須崎工業創立五十周年も近づいて来ましたが、先輩から後輩まで、手をつなぎ須工同窓会の輪を広げ、発展させて行きたいものです。

大阪支部では、会報でお知らせした様にゴルフ部もあり、又有志による親睦会も開催しています。事務局又は役員に連絡して頂ければ御案内致します。お気軽に参加して頂く様にお願致します。

高知支部だより

ヨーロッパ かけめぐる

昭和28年機械卒業

横川寛水

七月十日（二十六日）、ヨーロッパ六ヶ国を視察する機会に恵まれたが、十六日間の飛び歩きであつたから、いささか抽象的な観察であるかもしれないことをお許し下さい。

ロンドン（イギリス）の第一歩で、みどりにびつくりした。ヒースロー空港からロンドンへの道路は樹木のトンネルで、その合間にすばらしい田園と森の風景が広がる。その中にあるゴルフ場では、一日七、八百円で楽しめる。住宅も樹木のない家は「村八部」にされるのではなからうか？と思つたほど以下の各園でも同様であつた。

ロンドンの八割はエリザベス家の所有地で不動産屋はないらしい。霧のロンドンと云われるように、エリザベス女王の居城、バッキンガム宮殿広場で、

鼓笛の響きとともに霧の中から浮き出て、消えて行った近衛隊の交代式は夢を見ているようだった。タクシーでも、パブでも、お勘定は親切に説明しながらおつりをくれる。さすがに紳士だ。大英博物館に巨萬の財宝とともに展示されている古代ミイラは、世界的にも珍らしく人の形を止めているが、エジプ

トで静かにむむりたいのではなからうか？。古風な建物と意外にせまい街路であつたが、そこを歩く人々から国際都市を感じた。

アムステルダム（オランダ）は、長崎をはじめとして、わが国は古いおつき合ひだが、運河に囲まれた海より低い町には一年中花があふれている。ダイヤモンド工場見学の際、ひと足先に観光バスへ帰ると、運転手が笑顔で「買ったか？」「ノー」と答えると、「ダイヤモンド」とガラスの破片をさし出したので「サンキュー」と受け取り握手をした。レストランで同僚が「ビール、スリー」と注文すると、ボーイが「オーケイ」、「イチ、ニイ、サンネ」と云い乍ら去り、バラが咲いたを口ずさみながらビールを運んできた。

フランクフルト（西ドイツ）に二人の同僚のトラックが着いてない。調査依頼に対して係員の態度は日本では通用しない鷹揚さ、ねばりづよい交渉の結果、九時間後に無事ホテルへ、トラックは到着した。めつたに降らない雨の中の観光となったが、少しぐらい濡れても空気が乾燥しているから服もすぐ乾く。近代的な建築物と整理された道路。そこをすまし顔で、さつさと歩いて行くドイツの人びとから洗練された都市の印象が残っている。

ローマ（イタリア）は、西ドイツとは対象的だ、七つの丘を結ぶ要壁の中に古代と現代が調和し、かつてヨーロッパ征服のために、そして征服されるために使われた広い道路がのびている。トレビの泉の露天商の親父は「ニッポンお金持ちね、三つ千円安いよ」「ちょっと待て、金ない月賦ね」と人なつこい

が、信号待ちの車に寄って土産を売るジブシーの母子には要注意であった。

ヨーロッパには山がないのだろうか？と思うようになっていたが、スイスには山があった。アルプス山脈の中のレマン湖を抱くようなジュネーブの街、それを一望できる国際連合とI.L.O. 平均一ヶ月はバカンスを楽しみ、翌年のバカンスのために働くというヨーロッパ各国からの人々が、小型のヨットや湖畔のキャンピングで、家族ぐるみ、ゆったり楽しむ光景は、日本の慌ただしさと比較できない。

アルプスでも群を抜くモンブラン（標高四・八〇七m）へ、ロープウェイで一挙に登ったから、頭がボケて、体が重く、展望台への階段に座りこんだ。スイスはドロボーが居ない。と聞いていたが、街角の新聞売り場は、良心市形式で間違いないらしい。駅前で時計店を営む老夫婦は、私の予算に応じて約一時間、納得のいく品定めをさしてくれた。

ジュネーブからパリへの新幹線はベルなして無断発車するが、座席は通路をはさんで二人分と一人分だから、ゆったりしている。

パリもまた、古跡名所の多いところだが、ルーブル美術館の二万点を観賞するには時間が足りない。早足で廻り、廊下で一眼していると、日本のギンギラおばさん群が来て、「あんだ、どこ」生返事をする。「タイペイらしいわ……」などと勝手な品定めをするので、「アイアム、プエルトルコ」と云って逃げて来た。リドの踊りを見るべきだと云われていたが、宝塚歌劇と歌舞伎のミックスとしても云えようか？。華麗さと、舞台の回転は目をそらす間がなかつ

た。その踊り子八十名は、手足の長さを誇るアングロサクソン（イギリス人）以外はダメらしい。ではパリジエンスは？とたずねると、ガイドが「フランス人形知ってますか」と指差した女性は金髪の小柄な、均整のとれた美人であった。

ヨーロッパには歴史と伝統、みどりとロマンがあった。同時に、海と山と川と太陽に恵まれた日本の自然を、もつと大切にしなければ……と痛感しました。

高知支部だより

高知支部

第九回総会報告

昭和28年造船卒業

岡林幸保

須工同窓会高知支部の第九回総会が、去る十月二十五日、高知市の山内会館三階高砂の間に於いて開催されました。同窓高知支部会員四十五名、来賓として母校の先生方九名、及び同窓須崎支部の寺田郁雄支部長の出席を得て、総会を無事終了することが出来ました。ご協力、ありがとうございます。出席下さいました会員の方々、諸先生方に改めて厚く御礼申し上げます。

総会に先立ち、来賓を代表して森岡校長先生より開催の祝詞、母校の近況、三年後は母校が創立五十年の記念の年となる等々のお話を頂戴した。

総会は議長団に二十六年機械科卒業の汲田信男さ

んと、不肖、岡林が選出され、議事進行をつとめさせて戴きました。

竹内良一支部長、井上健弘会計、森久敬会計監査が、夫々の役職立場から、議事についての報告、説明を行ない、いずれも万場一致の承認を得て、可決されました。また竹内支部長から、特に終身会費の未納会員については早期納入を呼びかけ、お願いしました。

とりわけ、昭和六十三年度の事業計画の内、三年後に迫った母校の創立五十周年記念に於ける記念事業（校旗の新調、糺町の旧校舍跡地に記念碑の建立、同窓会名簿の作成）については全面的に協力、支援して行くことが取り決められましたので、本日の総会に何かの都合で止むを得ず出席出来なかつた会員各位におかれましても、充分にご理解下さいましてご協力、ご援助をたまわり度く御願ひ申し上げます。

この記念事業に対する協力、援助は同窓高知支部のみならず他の支部も、こぞって参加する意思表明をしております。

去る十月二十二日には同窓会大阪支部の総会が開催されました。不肖岡林が同窓会本部及び高知支部の役員代理として、出席させていただきました。

若し同窓会員も多数出席されておりました。京滋支部、兵庫支部からも代表の方が出席され、総会は熱気あふれる中で進行されました。大阪支部会員もこの記念事業に大きな関心を持ち、既にその援助活動に入っております。

地元支部は勿論須崎支部ではありませんが、それに

次ぐ地元支部とも云える高知支部としても他の支部に、ひけをとらない活動をして行こうではありませんか。

さて総会の続きにもどりますが本年は役員改選の年であり、その議案を諮ったところ現役員留任として新たに理事二名の方が推薦され、承認可決されました。新理事の方は、十八年機械科卒業の広田四郎さんと、二十年機械科卒業の吉岡豊延さんであります。ご紹介、ご報告申し上げます。

総会が無事終了し、清家同窓会本部会長の乾杯の音頭で懇親会に移り、和気合々の内に時をすこし、最後に校歌斉唱で閉会としました。

今回の会で支部役員の一入として、感激したことを書かせていただくことをお許し願いたい。

それは総会の始まる直前の時刻であった。五十五年電気科卒業の明神良房さん（佐川町在住、四国電力勤務）から「出席の返事を出していた明神という者ですが、仕事の都合で遅くなったが、行ってまだ間に合うだろうか、交通の便が十九時三〇分でない」と佐川を出る便が無い、会場に到着するのが、二〇時三〇分頃になるのではないだろうか」との電話であった。私は「その時刻は総会は終わっているが、懇親会が二時までやっているの、出て来れるならば来て欲しい」旨を伝えた。

二〇時二〇分頃、私は彼の事が気になっていたので受け付けて待っていた。待つほどの事もなく彼は来て呉れたのである。私は早速、顔見知りの母校の先生の所に案内した。若い年代の同窓生が同窓会の事に関心を待っていて呉れたこと。出席の返事を

出していたその義務を果さんとしてはるばる佐川から参加して呉れたことに対して、言い知れぬ喜びを感じた。熱心な責任感のあるこうした若い会員の居ることに支部役員の一員として同窓会発展の為に、まだまだ努力しなければならぬ責任があると痛切に感じたものであります。

又懇親会では、野球部後援会長の横川寛水副部長（28M）から「野球部のためにカンパを……」と懇願の挨拶がされ、計35000円が、森岡清校長先生に託されました。

向う二年間、役員の大役をお、せつかりましたが出来る限りのことを、頑張り務めさせて戴きますので、どうかよろしくご指導の程をお願い申し上げます。

末文で失礼ですが、大阪支部の役員の方々、会員諸兄には、ずいぶんとお世話になりました。本紙上をお借りして厚く御礼申し上げます。と共に母校の益々の発展と同窓会員各位のご隆昌、ご多幸を祈念致しまして、高知支部第九回総会報告とさせていただきます。



第九回高知支部総会（10月25日）

「この頃 想ひごとく」

昭和21年機械二種卒業

藤戸 進

五十四年、窪川町長にかつぎ出され、原発町長と云われた。前回立候補の際「任期中に原発事前調査に着手します」と公約したが、任期を約一ヶ年残して、公約の実現が不可能なことが明確になった時点で、政治家のはしくれとすれば、男らしく出所進退をきちつとすべきであると判断して退任した。そのことについて賛否ある中で、県外在住の人からは「土佐のいごっそうの典型だ」とよく云われる。そうすることが自分自身にとって不利であることを承知しておりながら、一度決めたならそうせすにはいられないのが、いごっそうだとすれば、なる程いごっそうかな、とも思うこの頃である。

原発について、やれ安全だ、いや危険だ、と論議が盛んであるがそれにも感ずることの一つは「民主主義と満場一致」についてである。イザヤ・ペンダサンは「日本人とユダヤ人」の中で「全員一致の議決は無効である」と問題提起した。確かに物事には解釈が一つしかないということはある得ない。かならず相矛盾する見解が成立するはずである。だからその意味では全員一致というものはあり得ない

はずなのに日本では之が要求されるのは何故か？。中根千枝先生は、日本人は理性に訴えるより情緒に訴えることによって行動する人種だと指摘している。私も今、原発論議を突き離して見たとき、そんな感じが出てこない。

学芸高の中国列車事故は本当にいたましい事故だが中国の列車の運行管理技術は日本の昭和三十年代のレベルだと報じていた。そう云えば昭和三十六年から四十五年の十年間に所謂「不慮の事故」による死者は四一万二千人にのぼるそうだが、昭和三十六年などは一年間だけで二千五百八十二人が鉄道で命を落している。自動車事故に至っては毎年一万人前後を数える。だからと云って鉄道や自動車を廃止しろとは誰も云わない。飛行機にしても科学の粋をあつめてなお且あれだけ事故が頻発するのだから不安をおぼえない方がおかしい。それでも飛行機を飛ばすなど云う声は出ない。何故ならそれが必要だからだ。原発も同じだ。資源のない日本が世界に冠たる国として君臨し続けるには最低条件としてエネルギーだけは豊富な供給体制を確保する必要がある。

ユーゴーの「レ・ミゼラブル」の主人公ジャン・バルジャンがパンを盗んだのは飢えによるものである。だから悪いのは「飢え」である……と云うような危弁（道徳）と（経済）をすり替えた危弁がマスコミにも社会の風潮にもある。最も大事な教育にもその様な風潮のあることが気になる。

教育は崩壊している。何故この様な教育の荒廃が起ころのたろうか。母親が甘すぎる、父親が弱すぎる、先生の指導に問題がある、大学入試制度が諸悪

の根源だ等々原因のなすり合いだ。が現状はそれ程悠長ではない。例外の子供が荒れるのでなく、共通の原因が働いていると考えられる。現在の教育荒廃の本当の原因は親も教師も教育に対するとらえ方の歪みにあると思う。教育のとらえ方が狂っていると、これがよい教育の仕方だと思つて、教師が努力すればする程子供は益々狂うことになるし、教育は益々間違つた方向に進むことになる。日教組が教育荒廃の責任を他に押しつけようというスリ替え論議を強弁する限り教育はよくならない様に思う。山本周五郎の「青べか物語」に「経済原理」と云う章がある。

東京から田舎に赴任して来た先生が、地元の少年達が鮎をとつてはいるのを見て「鮎を売ってもらえないか」と声をかけた処、少年達は非常に渋つたふりをして結局値をつり上げて売ってくれた。その後、味をしめた少年達は何度も鮎を売りに来て先生は止むを得ず買わされた。しかし四度目は懐の窮乏のためきっぱり拒絶した。すると少年達は「それじゃ、これを先生にくんや」と云つて鮎をたぐいで置いて行った、という話である。その章の最後に作者は次の様に云つている。「私は自分の大きな過誤を恥じた、少年達に狡猾と貪欲な気持ちを起こさせたのは私の責任である。はじめに私は、「その鮎をくれ」と云えばよかつたのだ、売ってくれと云つたためにかれらは狡猾と貪欲な気持ちに取り付かれた、私のさみしい懐を搾取しながら彼等も幸福ではなかつた。その期間かれらは貪欲な漁夫であり、悪賢い商人だったからだ。私は深く自分を恥じた」。何とすばらしい先生だろう、私は教育問題を考える時、この物語

を思い出す。そしてこんな先生が今何割位いるだろうかと考えたりする。

幡多支部だん

「土佐の小京都

中村市」

昭和35年機械卒業

松浦政志

須崎にて生を受け年月の過ぎる早さが身にしみてわかる。こうして私の最も不得手とする原稿を書くのにも、老眼鏡の世話になっている。同年の諸兄はいかがなものかと、ふと母校を思い出すと、木造のひなびたそてつに守られた玄関、古い段車式の旋盤の有った機械実習棟、糺池に面したグラウンドと、やはり旧校の事ばかり、今でも校舎跡の道路を通るたび、なつかしんでいるのである。

私が、この中村市に住むようになって、早いもので、もう二十二年になり、すっかり、中村人になった気がする。三十五年、須崎工を卒業、大阪の淀川製鋼所入社。四十一年退職、Uターン。こゝで何由か、中村の建設会社に入社、務める事八年間、全くの転職である。四十九年に独立し、現在の建設会社を営んでいる。本年五月、幡多支部総会において、前支部長の吉村功先輩に、軽くまわされ、支部長をおおせつかった次第であるが、会に出席したメンバーの中で、年が吉村先輩の次で有ったのが、致命

傷のようであるが、吉村相談役を初め理事の皆さんの助けをかりながら、任期を務めなければと思っております。須工同窓会の役員及び会員の皆様の御指導をよろしくお願い致します。

さて私の住んでいる「土佐の小京都、中村市」を紹介致します。中村は日本最後の清流四万十川と、そして、後川と二つの川にはさまれた町、東山、鴨川、一条通り、大文字山、とまさに京都である。一条公が京の町をしのんだ由の地名が多い。人口は、三万六千位である。幡多の玄関都市、西に宿毛市、そして、南に土佐清水市があるが、当市に取って今一番有名になったのが、やはり、四万十川と、世界でただ一つの「とんぼ自然公園」であろうか、しかしこの四万十川でさえ、やはり水質汚染が問題視されつ、ある。やはり人間社会生活向上が自然破壊につながりがあるとすれば、問題のような気がするがしかし、今年は大変面白い話題がある。こゝ、十年來の、四万十川の鮎の豊漁である。近年の五倍はいると云う、落ち鮎解禁日を楽しみにして、今から網の手入れをしておかなければ。

そうそう、やはり、もう一つは太平洋の海の幸で有ろうか。私も、春三月ともなると、黒潮の狩人となる。遠く足摺岬より二、三十マイルの黒潮の辺りカツオの引縄漁で有る。早朝下田港を二時頃出港、六時、夜明け頃、漁場に着く。早速引縄の開始。鳥ナブラを探しさまようと、たいてい漁に合う。良い漁場には土佐清水、下ノ加江の漁船が何百隻もひしめき合う。まるで海の交通ラッシュであるが、釣り上げたカツオをその場で料理し、船の上で食味する

のが、これ又、最高である。他にもマグロやシイラと、色々な漁を楽しんでいるが、我が漁船、盛漁丸も古くなり、何とかせねばと思案中である。長い年月海に出ていると、何度となく恐い思いをした事もある。御用心、御用心。

中村市の紹介が、とんだ趣味話となったが、會員の皆様、夜の街へもおいで下さい。幡多美人が、心よく迎えてくれますぞ。そして、ゴルフの愛好者の皆様には、三つのコースがお待ちしております。人情溢れる土佐の小京都中村市へぜひどうぞ。



応接室にある、カップや優勝旗

相撲部 2 年 成 年

岡崎 (須崎) が横綱



成年二部個人決勝、岡崎が優勝を決めた場面

相撲

(伏見区花園総合体育館)

▽同個人1回戦

岡崎 おしとし 増沢 沢

(須崎工 広屋) (東京)

高教

▽同準々決勝 濱 上

岡崎 わたしこみ 鹿兒島

市役所

▽同準決勝

岡崎 つきおとし 岡田

(大阪) 学技術

志村 おしたおし 下

大阪・日本サ

業 建設工 業

▽同決勝

岡崎 つきおとし 志村

伝統がよみがえる

初心のぶしかりけい

昭和53年機械卒業
相撲部監督 岡崎 明

第四十三回国民体育大会(京都国体)にて、今大会から導入された成年二部個人戦で岡崎明(昭和53年機械卒)が「横綱」に輝いた。ツキも戻って、国体で制度変更があった節目には必ずと言っていいほど優勝を取る県勢のジンクスを守った。団体では教員(第17回青年(第2回)、成年(第35回))を制し、個人でも一般から成年に代る最後の横綱が、今大会成年の籠尾監督(KK太和)だった。

上位進出も期待された二部団体で、同点決勝の末に悔しい予選落ち。個人で決勝トーナメント戦に残った岡崎には、内心に期すものがあった。「最初は一つ勝てばベスト8だからと考えていた」(岡崎)のが、知らぬ間に心身が充実して準決勝。ここで当たったのが清水高出身で今年日体大を卒業したばかりの岡田(大阪)。「負けるか」の気合が掛かった。

岡崎は左からおっつけて突き離し、岡田が出てくるところを左から突き落とす本来の相撲を取り切った。「若い者に負けてなるかといった気迫勝ち」と籠尾監督が褒めた会心の一番だった。

決勝も今年近天を出た志村(大阪)とあって、「力勝負ではかなわないから、立ち合いて押し込み、左に突き落とす作戦」(岡崎)がズバリの中、二十九歳の気迫と老かきさが、二番続けて二十三歳の若さと力みを制した。

「(籠尾)監督さんに強化合宿で胸を出してもらったおかげ。ぶつかり合いなんて何年ぶりか分からないくらい」と、岡崎は高知市営相撲場で流した汗を感無量の面持ちで思い起こす。

ベテランの初心に帰ったけいこの積み重ねが、後進に刺激を与え相撲王国再建への確かな道しるべになるに違いない。

昭和63年10月18日 高知新聞より

初の海外遠征

パシフィック・リム・

トーナメントに参加して

昭和41年造船卒業

ソフトボール部監督

津野 隆

6月23日～27日の間、パシフィック・リム・トー

ナメント（環太平洋選手権）がサイパン島で行なわれ、日本ナショナルチームのコーチとして初参加致しました。チーム編成は、今年7月末カナダで開催された世界選手権のメンバー、64年に行なわれるアジア選手権、同じくカナダで開催されるジュニア世界選手権、それぞれの候補選手、一般9名、大学生4名、高校生6名計19名で編成されていました。高校生が全国で6名の内、高知県より須工生が2名、竹下明宏（投手）、鍋島純一（二塁手）が選出されました。この二人は来年のジュニア世界選手権のエース（竹下）、キャプテン（鍋島）として現在一次合格しています。又、OBの山崎正宏（61年機械科卒）も参加、山崎君は世界選手権でも正捕手、一番打者として大活躍でした。尚、山崎君は卒業後關夫センターに勤務しています。ソフトボール界の日本のエース西村君の速球120Kmを受け取る事ができる日本で唯一人の捕手として頑張っています。今年度の大会でも、日本リーグ、クラブ選手権、全日本選手権等、優勝に導く大活躍をし、須崎工高の名を全国に轟かせています。今大会で、竹下は常時100キロ

以上の速球を投げ、最高は110キロをマーク、この速球とチェンジアップとで相手チームを翻弄するピッチング内容でした。また鍋島は13打数8安打と大当り、6割1分5厘の高打率をマーク、日本チームで二番目という成績を残しました。チーム成績は4戦全勝で優勝致しております。

サイパンは、日本から3時間という近さゆえか、観光客の90%以上が日本人だそうです。ホテル、みやげ物店へ行ってもほとんど日本人でした。

ホテルのすぐ前が海水浴場になっており、灼熱の太陽、青く澄みわたった海と遙かに続く白い浜、ヤシの木に覆われた海辺は本当にロマンチックな感じでしたが、残念ながら日程の関係でロマンティストになる時間もなく、海水浴も一時間位しかできませんでした。試合は26日の昼過ぎに終わり、サイパン観光をしました。南北におよそ23km、面積約122Km²と小さな島です。観光にもそう時間は取りませんでした。観光した場所は、バンザイクリフ、旧日本軍の司令部跡、バードアイランド、砂糖キビを運搬していた豆機関車等でした。司令部跡もそうでしたが、戦時中、日本軍が使用していた戦車、大砲が道端にそのままになっているのには驚きました。また、沖繩が日本に掃蕩する前に沖繩で使用していたバスがサイパンで走っているのにも驚きました。

ホテル、食事等には不便を感じましたが、飲料水には困りました。現地の水は塩分が多く飲む状態ではなく、観光客用に日本から輸入しているポリ容器詰め飲料水を購入し、ホテルの部屋の冷蔵庫で冷やして飲んだ事でした。

初めての海外、大会という緊張の中でも、チームワーク良く楽しい思い出が残りました。また、竹下、鍋島両君はもちろんの事、私自身もこれからのソフトボール技術、精神面での向上、社会生活の上でも大きく役立つ遠征となりました。



サイパンにて、左より津野、鍋島、竹下、山崎

ソフトボール部 活動報告

部長 伊藤正孝
監督 津野隆

今年、後で報告させていただきますように全国インターハイに出場することができました。その折には同窓会、保護者、本校関係の皆様がたには、多大なご援助と御声援をいただきまして真にありがとうございました。この紙面をお借りしまして厚く御礼を申し上げます。

さて、I・Hも含めまして、この一年の活動を報告させていただきます。

例年の通り春の県外遠征として、愛知県刈谷市の日本電装での合宿を行い、関西地区少年男子ソフトボール研修会に参加しました。その成果を試す春季大会では、小津、宿毛工、清水、高知工を倒し決勝に進出しましたが、惜しくも安芸高に破れ、準優勝となりました。県体の優勝を目指し、毎日の練習に取り組み、また、五月の連休には、石川県に招待され、他県の高校との試合経験も積んで来ました。

いよいよ県体です。東工業、高知農業、清水、安芸を下し決勝戦です。相手は、昨年準決勝で破れた岡豊高校です。○一三と先行を許しましたが、五回に二点を取り、最終回には、バント安打を含む四連続安打による逆転サヨナラをすることができました。これにより、3年ぶり3度目の優勝と、兵庫県伊丹市での全国I・Hへの出場権を得ることができまし

た。

四大大会ではふるいませんでしたが、続く国体県子選では優勝、3年連続で、県体との両大会優勝は県内でも久しぶりのことであります。

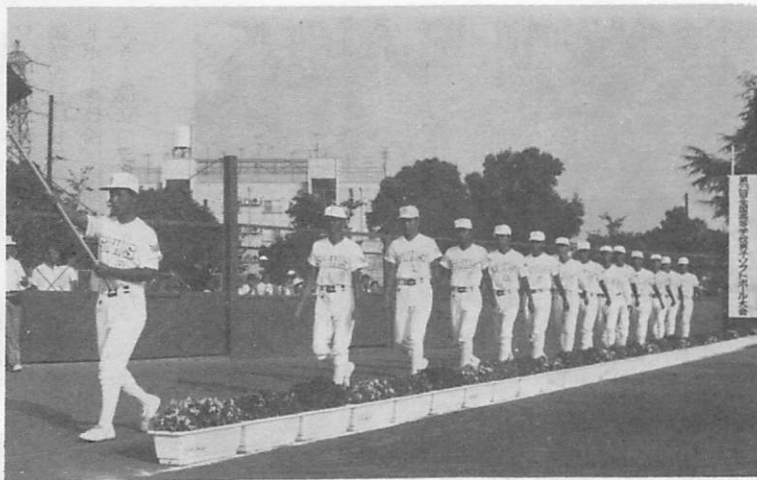
全国大会に向けての春野専用球場での練習の後伊丹に出発しました。1回戦、宮城県代表白石工業は、投手竹下が連続七奪三振、一試合十七奪三振（共に大会記録）、ノーヒットノーランと頑張り五一〇で下しました。

その後、鳥取県代表八頭高校を十一一、大阪府代表東住吉工業を五一一で下し、準々決勝は優勝候補の千葉県代表千葉敬愛高校です。両投手譲らず7回まで〇一〇、延長8回ついに力尽き〇一一と破れ、ベスト8となりました。全国制覇の夢はなりませんでしたが、選手全員がこの貴重な体験を活かして今後も頑張ってくれると思います。

須崎工ソフトボール部は、この大会を最後に1・2年生の新チームにバトンタッチをしますが、3年生の中から4名が、また監督が国体県選抜チームに選ばれました。昨年の沖繩で全国を一周した国体は、2巡目国体として、京都府で開催されました。ソフトボールは奈良との県境の加茂町で行われました。一回戦、不戦勝、二回戦は沖繩県との対戦でしたが選手の間及ばず惜敗してしまい、沖繩の優勝を許してしまいました。

最後に新チームです。3年生七名が抜けて1・2年生十三名でスタートしました。3年生の抜けた穴は大きいのですが、来年地元で開かれる64総体に向けて例年以上にきびしい練習に励んでいます。また、

選手として技術はもちろん、挨拶等の礼儀など、卒業後も一人前の社会人として恥ずかしくないような選手にと努力しています。今後も伝統ある須崎工業高校の名を辱めないように頑張りますので、他クラブ同様宜しくお願い申し上げます。



インターハイでの入場式

再興なった 須工ヨット部

ヨット部顧問(造船科教諭)

小松茂久

ヨット部再興1年目にして、国体に出場できたことは非常に喜ばしいことであった。が、しかし、その裏には、周囲の方々の多大なる協力と援助があったのである。

四年前にヨットが須崎湾に掃港せず、安和海岸に漂着するということがあり、救助艇無くしてのヨット部活動ができなくなっていた。そこで造船科へ着任1年目の昨年、造船科の山崎先生に線図を描いて頂き、造船科の他の先生方の御理解も頂いて、実習で救助艇を建造することになった。一週3時間の実習だけでは完成するのに相当な月日を要したてであろうが、造船クラブの絶大なる協力により、約六カ月で完成するに至った。進水、命名式には約50人近くものOB、教職員の方々に出席していただき、「第11須工丸」の安全を祈願することができた。

今年1月から、造船科の黒原・蔵下君兩名をヨット部に勧誘してヨット部が誕生した。乗るべきヨットの無いヨット部である。だが彼らは陸上トレーニングを続けてくれた。そんな彼らの想いも通じたのが、ヨット購入が本決まりとなり、ピカピカの新艇2隻を持つヨット部となった。ピカピカの新一年生4人の入部により6人での活動開始である。ところがここで頭を痛めたのはヨットの置き場所である。

出艇しやすいスロープを持った場所など、そんなにあるものではない。須崎湾を捜し回って、串の浦の国友造船が最適であろうと思われた。相談したところ、快く引き受けてくれた。(57年造船科卒、国友勉氏の造船所である)こうして、ようやく進水式の運びとなった。6月26日、有沢県教育次長を招いて進水式が行われた。あいにくの雨、そしてほとんど



ヨット部員と新艇

無風ではあったが、地元の須崎セーリングクラブの方々、学校関係者等がシャランペンで祝ってくれた。こうして本番の夏休みの練習となる。朝10時から夕方4時まで、日曜も休まずほぼ毎日練習をした。2人乗りの競技ヨットの経験の無い私には、わからない事も沢山出てきた。そこで高知大学の学生を呼んできて5日間程コーチしてもらった。又、地元の青木修一氏(37年機械科卒、新日鉄ヨット部OB)も手の空いた時間にコーチをしてくれた。こんなおかげで夏休みの半ば過ぎには何とか格好になってき

た。そして、県ヨット連盟が我々を国体少年男子の部に推薦してくれた。何とか目標達成である。

今年の国体ヨット部の部は、名勝天ノ橋立を有する京都の宮津湾で行われた。非常に風光名景な所ではあったが、レースのほうは雨、そして微風とコンディションは良くなかった。3日間のレースであったが、初日こそ風もあり雨も降らず予定通りレースが行われた。だが2日目、3日目は風も無くレースが2時間も延期され、雨の中海上で待たされる選手達は寒く、しんどかったであろう。成績のほうはと言うと、スナイプ級が41位、39位、35位と尻上がりの調子を見せ、総合40位。FJ級が43位、36位、41位の総合43位、胸を張れるような成績ではないかもしれないが、我々にとってみれば、初めてのレースで全レース完走できたことで当初の第一目標をクリアできたと思っている。又、1年生コンピのFJが前半14位で走ったり、大きなレースを経験した1年生4名が残ることなどはヨット部の財産となるであろう。

最後に、練習中に進路をゆずってくれたりする須崎湾の漁業関係の方々並びに港湾関係の方々、練習を助けてくれる須崎セーリングクラブ並びに本校OBの方々、ヨットの購入に尽力をいただいた方々、助言、援助をいただいている学校関係の方々に御礼を申し上げます。



昭和62年度決算報告書

昭和63年度予算(案)

費目	金額(円)	摘要
前年度繰越金	221,140	
収入会金	170,000	235名*2,000
特別会計利息	668,221	
雑収入	11,359	
計	1,370,720	
会議費	26,850	
事業費	715,200	開校記念品代 会報印刷代 会報送用紙 会報封筒 調査費
通信交通費	24,540	
事務消耗品費	5,428	
慶弔費	125,460	
支部配分金	337,800	
雑費	16,612	(2,202ミハライ)借入金利息
計	1,251,890	
収入	1,370,720	
支出	1,251,890	
収支差額	118,830円	

費目	金額(円)	備考
前年度繰越金	118,830	
収入会金	456,000	2,000円*228名
特別会計利息	630,000	
雑収入	5,000	
特別会計より繰り入れ	700,000	
計	1,909,830	
会議費	30,000	
事業費	1,250,000	開校記念品代 会報印刷代 会報送用紙 会報封筒 調査費 記念の 切手代・通信料・他 コピー代・他
通信交通費	80,000	
事務消耗品費	40,000	
慶弔費	250,000	敬送迎会・丸筒・他
支部配分金	185,900	関東181 中京136 近畿324 高知509 須崎662 幡多47
雑費	20,000	
備費	53,930	
計	1,909,830	

監査報告書

諸帳簿及び証書類等により監査の結果金額その他については相違なく、預金通帳・定期預金証書とも確実に管理適正に執行されている。

昭和63年5月21日

監査人 坂本 健三
山 地 健 三

63年度特別会計予算(案)

費目	金額(円)	備考
果樹積立額	22,610,000	
63年度納入予定額	1,500,000	
計	24,110,000	
50周年記念基金	1,000,000	4ヶ年積立
一般会計へ補助	700,000	記念碑等予算内へ
計	1,700,000	
63年度末積立予定額	22,410,000	

二 寄贈御札

竹村義典教頭先生より退職にさいし校旗を新調するさいにとご寄付を戴いております。有難うございました。

建設大臣表彰に輝く

建設業界における永年の功績がみとめられ、さる七月三十日、建設大臣より受章されました。おめでとうございました。今後益々のご活躍をお祈り致します。

(敬称略)

関西土木株式会社 代表取締役 笹岡 勲

(昭和二十一年機械科二種)

お知らせ

このたび事務室にファックスが設置されました。事務局への連絡等に利用下さい。

FAX (〇八八九) 四二一七七一五

終身会費納入者名 追加分

(62・10・11) (63・10・10)

昭和二十年 三木 正廣 竹田 秀夫
 中平 善造 門田 稲城 昭和二十一年 利岡 順三
 池田 長男 昭和二十八年 辻 良三

昭和二十年	三木 正廣	竹田 秀夫	昭和二十一年	利岡 順三	池田 長男	昭和二十八年	辻 良三
昭和三十三年	市川 忠	斎藤 康男	山本 亨	昭和三十五年	古谷 節雄	笹岡 公明	麻田 功夫
昭和三十六年	岡 岩雄	刘谷 光昭	昭和三十七年	山崎 昌彦	昭和三十八年	逸見 悦子	下元 陸生
昭和三十九年	山崎 好宏	昭和四十年	山崎 健三	昭和四十一年	谷 益好	戸田 富夫	今村 英夫
昭和四十二年	横山 英世	昭和四十三年	依馬 正明	昭和四十四年	山本 欽三	大崎 辰雄	片岡 康司
昭和四十五年	小島 洋一	岡村 一幸	大野 浩	大西 孝典	大西 修三	太田 久義	植田 一夫
昭和四十六年	片岡 康司	堅田 浩一	黒岩 弘	国澤 竜	坂上 勝介	住吉 稔	高橋 省二
昭和四十七年	中城 忠	寺田 幹根	津野 暢彦	谷口 茂行	笹岡 義満	門脇 幸繁	岡本 和彦
昭和四十八年	西川 祐生	中村 安幸	中城 信二	長尾 浩紀	中越 信二	戸田 裕文	遠山 博一
昭和四十九年	松岡 樹生	藤原 和男	正一	濱田 章宏	濱田 章宏	西添 美夫	西添 美夫
昭和五十年	中平 潤	昭和五十一年	谷 益好	戸田 富夫	今村 英夫	岡本 益男	石邑 文雄
昭和五十二年	長山 孝弘	山本 光浩	昭和五十四年	村中正興	昭和五十五年	井口 雅史	今村 泰彦
昭和五十六年	宮崎 真一	宮崎 豊	昭和五十七年	丸岡 裕	古谷 圭二	濱口 幸司	西森 真一
昭和五十八年	谷内 義則	谷岡 正英	中山 和巳	前田 智司	本山 宏樹	山崎 克典	岡崎 央
昭和五十九年	小泉 哲也	宇賀 裕倫	吉岡 昌信	横山 健治	矢野 進一	山崎 靖文	森田 博文
昭和六十一年	尾崎 仁泰	片岡 一彦	片岡 和也	堅田 充	川崎 忠雄	土居 篤司	徳弘 淳二
昭和六十二年	市川 栄一	朝比奈 強	青木 司	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也	岡崎 尚
昭和六十三年	市川 栄一	井上 昭仁	植田 一夫	大崎 正文	太田 久義	大西 修三	大西 孝典
昭和六十四年	大崎 隆裕	今村 泰彦	大野 豊	岡崎 敦也	岡崎 尚	尾崎 仁泰	片岡 一彦
昭和六十五年	井口 雅史	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也	岡崎 尚	尾崎 仁泰
昭和六十六年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和六十七年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和六十八年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和六十九年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和七十年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和七十一年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和七十二年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和七十三年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和七十四年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和七十五年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和七十六年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和七十七年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和七十八年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和七十九年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和八十年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和八十一年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和八十二年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和八十三年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和八十四年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和八十五年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和八十六年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和八十七年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和八十八年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和八十九年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和九十年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和九十一年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和九十二年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和九十三年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和九十四年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和九十五年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和九十六年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和九十七年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和九十八年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和九十九年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也
昭和一百年	岩本 光雄	梅下 陽宏	大野 隆裕	今村 泰彦	大崎 隆裕	大野 豊	岡崎 敦也

高知県立須崎工業高等学校同窓会則

第一章 総則

オ一条 本会は高知県立須崎工業高等学校同窓会と称する。

オ二条 本会は会員の親和、母校の隆盛を図るを目的とする。

オ三条 本会は本部を母校に置き、正会員多数の地域（職域）に支部を置くことができる。

オ二章 事業

オ四条 本会はオ二条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 会報並に会員名簿の発行及び配布
- (2) 母校の発展に関すること
- (3) 会員の親和に関すること
- (4) その他目的達成のために必要なこと

オ三章 会員

オ五条 本会の会員は次の者をもって組織する。

1. 正会員

- (イ) 高知県立須崎工業学校を卒業した者
- (ロ) 高知県立須崎工業高等学校併設中学校を卒業した者

(イ) 高知県立須崎工業高等学校を卒業した者
(ニ) (イ) に在籍した者で会長が推薦し理事会にて認められた者

2. 準会員

高知県立須崎工業高等学校在校生

3. 特別会員

オ四章 役員

オ六条 本会に次の役員を置く

会長一名・副会長二名（内一名は本部事務局長を兼ねる）・会計一名・常任理事若干名・理事若干名・監事二名

オ七条 役員は選出は次の通りとする。

(1) 会長、副会長、会計、監事は理事会において選出する。

(2) 理事は総会において選出された者および母校在職正会員とする。

(3) 常任理事は理事会で選出する。

(1) 会長は本会を代表しその運営を統括する。

(2) 副会長は会長を補佐し会長事故あるときは、その職務を代行する。

(3) 事務局長は本部事務局を主宰し、本会の事業を執行する。

(4) 会計は本会財政の運営に関し、予算収支の企画および収支の執行に当る。

(5) 常任理事は本会の常務を執行する。
(6) 理事は本会の重要事項を審議する。
(7) 監事は本会の会計監査に当る。

オ九条 本会に名誉会長を置き母校校長を推薦する。

オ一〇条 会長が必要と認めるときは、理事会にはかり顧問および相談役を置くことができる。

オ一一條 役員は任期は二ケ年とする。但し再任は妨げない。補欠のために就任した者の任期は前任者の残余期間とする。

オ五章 会議

オ一二條 本会の会議は総会、理事会および常任理事会とする。

オ一三條 総会は二年毎に開催し、必要に応じ臨時に開催する。

オ一四條 総会は会長がこれを召集し、出席者の過半数で決定し、可否同数のときは議長が決定する。

オ一五條 理事会は次の場合に開催する。

(1) 会長が必要と認めるとき

(2) 理事の過半数の請求があったとき

オ一六條 理事会は総会に次ぐ決議機関で次の事項を決定する。

(1) 本会の規約の作成変更および役員選出

(2) 収支予算ならびに決算

(3) 事業の計画およびその他重要な事項

オ一七條 常任理事会は会務の迅速円滑な執行をはかるため、総会および理事会の決定にもとづき、直接業務に必要な事項を審議し実行する。常任理事会の決定および実施事項は理事会に報告し、承認を得なければならぬ。

才六章 事務局

才一八条 本部に事務局を置き、事務局長が統括する。

才一九条 事務局の構成は次の通りとする。

- 1、事務局長
 - 2、会 計
 - 3、母校在職正会員
- 才二〇条 事務局は總會、理事会、常任理事会の決定に基づき必要な会務を執行する。

才七章 会 計

才二条 本会の財政は会費、入会金、寄附金その他の収入によつてまかなう。

正会員は会費（終身会費）を納入しなければならぬ。

会費（終身会費）は一万円とする。

入会金は入学時二千円を納入するものとす

才二条 本会の会計年度は四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

才三条 本会は会計年度末に支部に対する配分金額を理事会にて決定し、翌年度六月末までに還元する。

附 則

昭和十五年一月二〇日施行の本会則は、昭和十四年三月一日改正、昭和十五年八月一日改正、昭和十六年八月九日改正する。
昭和十六年六月二〇日改正。

各種証明書の発行について

(母校事務室からの伝言)

証明書が必要なときは、法令の定めにより証明書交付申請書別紙(用紙は事務室に備付)を校長宛提出しなければなりません。(第二号十八頁の様式)

申請書には必要事項記入のうえ押印し左記金額に相当する高知県収入証紙を貼付してください。遠隔地からの申込みは事務手続に相当の日数を要しますので早目に申込みをしてください。又県外には高知県収入証紙は販売していませんので、切手、又は現金を同封してください。

なお返信用の封筒には切手の貼付、住所、氏名、郵便番号をお忘れなくご記入下さい。

手数料は次のとおりです。

卒業 証明書	一通につき二〇〇円
成績 証明書	一通につき二〇〇円
単位修得証明書	一通につき二〇〇円

送り先〒高須崎市多の郷和佐田甲四一六七ノ三

高知県立須崎工業高等学校事務室

電話(〇八八九)④一八六一

④一八六一

証明書の件につき不都合または不明な点等がありましたらいつでも右記電話番号の証明係までお電話ください。

編 集 後 記

第十三号の会報を、お送りいたします。

各支部の役員、並びに会員の皆様には、原稿をお願いいたしましたところ、心よく原稿を送っていただきありがとうございます。

紙面の都合上、終身会費納入者名を本年度のみとさせていただきます。申し訳ございませんが、ご了承下さいませ。

今後につきましては、良い記事がありましたら事務局まで、ぜひ直接お送り下さい。次の会報に載せたいと思います。

尚印刷につきましては、須崎市内の笹岡印刷所さんにお願ひし、大変お世話になりました。心から御礼申し上げます。

会員の皆様の御活躍をお祈り申し上げます。

事務局編集委員

昭和六十三年十一月二十日発行

発行所 高知県立須崎工業高等学校

同窓会事務局

印刷所 高知県須崎市東古市町二番十六号
有限会社 笹岡印刷所